

よさこい指導に関する取り組みについて

～子どもの心とからだに着目して～

A study of the yosakoi lessons

～ The focusing of the mental and physical for children ～

宮 辻 和 貴¹⁾ 河 南 舞²⁾

Kazuki MIYATSUJI¹ Mai KAWANAMI²

要 旨

本研究ではU小学校の解放団体であるよさこいチームに所属する小学校高学年の女子生徒（11.1±0.8歳）を対象に「よさこい指導」を実施し、よさこいに関するアンケート調査、スキル調査およびインタビュー調査を行い、よさこいが子どもの心（協調性や積極性など）とからだ（表情や踊りのスキルなど）に与える効果には、どのような関連性がみられるのかについて明らかにすることを目的とした。

その結果、アンケート調査に関しては、よさこい以外の習い事をしていると回答した女子生徒は3名（約27.3%）、残りの8名（約72.7%）はダンス以外の習い事は実施していなかった。また、その他のダンスのジャンルを習っている女子生徒は、約54.4%（6名回答）であった。また、よさこい全般に関する質問を「積極性」、「協調性」、「自主性」、「自己評価」、「愛着」の5項目に設定した。ここでは低値が高評価であるため、協調性（24点から21点）、自己評価（29点から28点）、愛着（12点から11点）に高評価が得られ、積極性（25点から27点）および自主性（18点から23点）は低評価を示した。さらに、よさこいの普及に関して、7月の調査では「はい」と答えた女子生徒は90.9%（約9割、10名）、同様に11月の調査において「はい」と答えた女子生徒は100.0%（10割、11名）であった。そして、よさこいの普及に対する意見として、調査前は「大勢で踊ると楽しいから」という自分に焦点をあてた意見が主であったが、調査後は「観客に楽しんでもらいたい」とした観客に焦点をあてた意見が述べられた。

スキル調査においては、指導者が独自に設定した項目を用いて評価（点数が高い方が高評価）したところ、鳴子（21点から35点）、リズム感（25点から34点）、腕の伸び（25点から36点）、ステップ（28点から34点）および表情（26点から37点）の全項目の値が向上した。

インタビュー調査では、全体的に積極性の向上が強く窺え、次いで自主性や協調性の変化も話の中で垣間見ることができたため、いわゆる心身の上達を観察することができた。

以上の結果より、よさこい指導は全体的に女子生徒の積極性や協調性に対して一定の成果が得られたことから、少なからず身体面（スキル向上など）および精神面（表情や踊りなど）に良い影響を与えている活動であることが明らかとなった。

キーワード：よさこい指導、女子生徒、アンケート調査、スキル調査、インタビュー調査

1) 神戸親和女子大学 発達教育学部 ジュニアスポーツ教育学科 講師

2) 神戸親和女子大学 発達教育学部 福祉臨床学科 2016年度卒業生

1. 緒言

近年、ダンスを始めとする表現運動や身体表現は、学校教育において必修化され、より身近なものへと変化してきている（文部科学省，2008）。秦（1999）は、ダンスは非常に多様な内容として位置づけられているが、運動欲求、表現の欲求、他とのかかわりを求める人間本来の欲求に根ざす活動であり、心を開き多様な学習経験を重ねることで、個性化を目指す為の学習に最も良い成果をもたらすと考えられている。その結果、他とかわることから個人の開発へと学習を深めていくことが望ましいと示している（秦，1999）。湯浅（2016）は、子どもたちは抵抗感を順序立てて少しずつ取り除いていくことで、リズムにのることの楽しさを感じたり、動きの質を高めるために、試行錯誤しながらいきいきと学ぼうとしたりする姿をたくさん見ることができることを明らかにしている。

これまで「よさこい」とは、昭和29（1954）年に高知県のよさこい祭りから発祥した、鳴子を手に持ち各チームオリジナルの地域の特色を尊重した楽曲を用い、隊列を構成して踊る、踊りのことであると定義されている（公益財団法人 高知市観光協会，2016）。まず「よさこい」の歴史に注目してみると、昭和29（1954）年に発祥したのを皮切りに、昭和37（1962）年にはNHKの郷土民謡全国大会へ出演したことが契機となり、市民の祭りから高知県民の祭りとして浸透するまでに至っている。そして、昭和45（1970）年には日本の祭り10選に選ばれたことにより、同年に大阪で開催された日本万国博覧会に参加することとなった。翌年には、フランスのニースで行われたカーニバルに招待され、サンバ調にアレンジした「よさこい」を披露している。さらに、昭和58（1983）年になると各チームはそれぞれの個性を持ちつつ、オリジナリティ溢れる自由な祭りへと変化することとなる。これらの活動の成果が、平成11（1999）年に高知「よさこい」祭りに魅せられた北海道の大学生によって「YOSAKOI ソーラン祭り」を開催する運びとなり、そこから波紋

を呼び日本各地において展開されるまでとなっている。それを受けて高知が発祥である「よさこい」祭りは、「よさこい全国大会」へと変貌を遂げ、平成13（2001）年には“日本人のアイデンティティを求めて”というテーマで伝統を守りつつ、原宿表参道にて「スーパーよさこい」が開催されることにつながり、全国から有名なチームが集結するまでに発展することとなった（公益財団法人 高知市観光協会，2016）。

一般的に「よさこい」という言葉は、高知県の方言である土佐弁が由来となっており、いわゆる「夜さ来い」という意味で認知されている。実際のところ、これは祭りが遅くまで続くことから、「夜にいらっしゃい」という意味が込められている。また、踊りの形式としては、「パレード形式」や「ステージ形式」など決まりはないが、各地域の祭りの特色や会場により様々な形式で踊られている。そのため世間一般的である高知のよさこい祭りでは、「パレード形式」が主流で一番長い距離は550mもの間隔となっている。事実、パレードでは4列編成を基本とし前進する踊りで一曲を連続して踊ることから、その踊り子の前には各チームオリジナルの地方車と呼ばれるトラックが走り、そのトラックから音源を流したり、煽りを行ったりしている。さらに、場所によっては約4回連続して踊るような場所も見られる。なお、使用する曲、衣装、化粧、鳴子や振り付け等においても各チームの個性を活かしたオリジナルのものが作成されている。

現在、「よさこい」は極めて自由な踊りとして位置付けられており、数少ないルールを除いてはチーム毎に自由な作品を創造することが可能な表現運動および身体表現ともいえる。特に、よさこい活動は、それぞれの地域やチームの特色および個性を重視する傾向にあるといわれている。事実、昭和29（1954）年に当時の不景気風を吹き飛ばし、市民を元気づけようといわれたのが始まりであり、各地域の特色や民謡を尊重した楽曲等を使用することが多いため、地域に根付いた活動をするチームも少なくない（公益財団法人 高知

市観光協会, 2016)。本研究では子どもに焦点を当てているため、ここでは教育的立場という観点から注目してみると、金田(2012)は中学校における集団活動の役割と意義に関して、「よさこい踊り」を心理および社会的特性から注目した上で、その教育的効果について検証している。その結果、よさこい活動は学校・生徒・社会をつなぐ役目を果たし、人間関係を築く力の育成につながることを明らかにしている。さらに、子どもの発達を総合的に促す保育活動について調査した宮川ほか(2015)は、子どもたちによる箱根ソーランの練習過程について事例的に観察し検討している。その結果、振付の練習から発表まで、つまり、習い始めから完成までの一連の流れの中で、動きの幅の広がりや、無駄のない動作の獲得など子どもたちの変化が見られたことを示している(宮川ほか, 2015)。

次に、「踊り」という共通点からダンスに関する教育的な取り組みについて調べてみると、幼児から大学生までの研究報告が数多く示されている(増山, 2003: 和田, 2010: 原田, 2012: 白井, 2012: 河合, 2015)。まず、幼児期の親子ダンス教室における子どもの成長に対する母親の意識調査を行った和田(2010)は、親子ダンス教室に参加して他の子どもと踊ったり、順番を守って活動したりすることにより、協調性やルールを守る姿勢が身についたと報告している。また、河合(2015)は「ダンス・ワークショップ」と呼ばれる活動に着目し、熟練の進行者による小学生を対象とした事例を取り上げたところ、参加者が主体的に、自由に動きを生み出す体験が創り出されているということを明らかにしている。これは学習者の主体的な動きを引き出しつつ、学習者と指導者の双方向に学びのあるダンス授業として、学校教育への一助となることを示唆している(河合, 2015)。白井(2012)は、大学生を対象に行われたコミュニティダンスワークショップの参加体験とイメージに関する研究を行い、参加体験により心理状態がポジティブな傾向へ変化する可能性が大きいことや、主体的に取り組むことによる心身

の変化や感情がより良い刺激を与えることにつながることを報告している。なお、コミュニティダンスとは、「ダンスの経験の有無、年齢、性別・障害に関わらず誰もがダンスを作り、踊ることができる」という考えのもと、アーティストが関わり“ダンスの持っている力”を地域の中で生かしていく活動」のことである(NPO 法人 ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク, 2010)。増山(2003)は、コミュニティダンスにおける実践事例(独自性と生涯学習における意義)として、①つながりを生み出す②多様な要素を取り入れる③自己表現と自己肯定④心と体の調和⑤芸術の享受の5項目を示しており、この考え方が自立した個々の新たな学習形態の出発点になることを示唆している。さらに、ダンス・ワークショップという集中的体験学習におけるグループによるダンス創作に着目した原田(2012)は、生徒達がダンスのテクニックのことではなく、自分自身が表現者として、その場にどの様に存在するのか、他者に対してどのような理解を示すのかという自他についての本質的な気づきであり、それらの学びが得られたと報告している。このように他人と一緒に踊るといふ活動が、身体的・精神的・社会的に何らかの影響を及ぼしていることについて、多角的な観点から報告されていることが理解できる。これら「よさこい」や「ダンス」などの表現運動および身体表現は、体験者同士の相互関係はもちろんのこと、体験者自身の「心」と「からだ」に対しても影響を及ぼすものと考えられるため、それぞれの関係性を把握することは重要な課題である。

そこで本研究では、よさこい指導に関するアンケート調査、スキル調査およびインタビュー調査を実施するとともに、よさこいが子どもの心(協調性や積極性など)とからだ(表情や踊りのスキルなど)に与える効果には、どのような関連性がみられるのかについて明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. 被験者

被験者は、平成28（2016）年度U小学校の解放団体であるよさこいチームに所属する小学生高学年（9～12歳）の女子生徒を対象とし、アンケート調査およびスキル調査（よさこい動作に関するビデオ撮影など）、インタビュー調査において撮影不能、記入漏れ等の不備がある場合は分析対象外とした。また、被験者の内訳は、小学4年生が3名、小学5年生が4名、小学6年生が4名の総計11名（11.1±0.8歳）であった。

なお、被験者には本研究の目的や内容について詳細に説明し、このうち研究主旨（各調査への協力は自由であり、決して強制ではないことを含む）に同意を得た上で測定を実施した。その上で倫理的な取り組みとして、本研究は神戸親和女子大学発達教育学部福祉臨床学科の承認を受けて行った。

2. 実施期間・実施場所

実施期間については、平成28（2016）年7月14日から11月3日までの約4ヵ月間にわたって実施した。また、実施場所に関しては、U小学校の多目的ホール（室内）により行った。

3. よさこいの動き

A. よさこいの動きについて

よさこいの動きは、一般的な踊りに加えて曲も自由に組み立てられるという特徴を持っている（YOSAKOIソーラン祭り組織員会・体育YOSAKOIソーラン研究会, 2006）。宮川ほか（2015）は、動きとして波、網ひき、魚投げ、鉢巻・たすきがけなど、ソーラン節の内容に合わせた動きによるモチーフを組み合わせた踊りの構成を組み立てることが多いと示している。その中でも、総合的に観察される動きが、「四股立ち（しこだち）」である。この姿勢は、足を肩幅の2倍に広げることにより、つま先を外に向けながら、太ももが床と平行になるくらい腰を下ろし、骨盤を立てた状態がよく用いられている。このように踊りや音楽など

の表現が自由にできることから、年齢や習熟度に対応することができる特徴も併せ持っている。

B. よさこいの指導について

1) プログラム日程

よさこい指導は、必ず週の中盤である木曜日に1時間半のプログラムを組むことにより、対象となる動作の指導を実施した。

2) 健康状態

基本的に「踊る動作」は激しい運動であるため、よさこい指導当日における各個人の健康状態（運動制限、発熱、倦怠感、睡眠不足、食欲不振など）についても把握することとした。

3) 動機づけ

練習を始める際には、全員で円陣を組むように心がけ、参加している生徒に均等に声掛けのリーダーが回ってくるような配慮をすることにより、それぞれの積極性を伸ばすことを意識した工夫を行った。

4) ウォーミングアップ

ウォーミングアップについては、J-pop（AAA・777～We can sing a song～）ミュージックを用いて、アイソレーション・ストレッチを含むヒップホップダンスを基にした振り付きで、よさこいの動きにつながるように個々の能力を最大限に引き出すための入念な準備運動（動的）を実施した。これらの注意点としては、「四股立ち」等を正しい姿勢にて行えるように指示しながら動きの状態を把握することに努めた。そして、腕をまっすぐ伸ばす感覚や、床と平行に伸ばす感覚などを身に付けることを意識させた。

5) 鳴子練習

鳴子練習では、リズムに合わせた2段階のテンポで同じ振りを繰り返す動作を反復させた。その場合、テンポが早くなっても意識することを徹底させ、正しい鳴らし方を身に付けさせるためにリズムを上手に保てるように指導を実施した。

6) よさこいの動きの練習

よさこいの動きの練習の総仕上げとして、今年度の動作で用いるメイン演舞曲（オリジナル楽曲）を流して一連の動きの習得に向けた取り組みを実

施した。まず、全員でよさこいの動きを一度通して踊り、これ以後は1場面1場面を取り出しながら少しずつ動きの改善に努めた（個人も同様に指導を実施）。全てに共通していることは、「腕を伸ばすこと」、「ステップを正しく踏むこと」、「視線を上げること」、「姿勢を整え、合やすこと」であることから、それらを中心に指導を展開した。

7) クーリングダウン

よさこいの動きの実践により起こりうる外傷や障害などの事故防止に努めるために、実践終了後における健康状態の確認（外傷や障害などのスポーツ傷害の発生の有無）およびクーリングダウ

ン(静的な整理運動)についても併せて実施した。

4. アンケート調査

よさこいを通して変化する子どもの心とからだの関連について把握するため、アンケートによる調査を行った。アンケート調査に関しては、よさこいをテーマに設定したオリジナルの質問項目（5項目）を作成した（表1）。

なお、前後比較を実施するため、アンケートは実験調査前の平成28（2016）年7月と実験調査後の11月における2度にわたって調査を行った。

表1. よさこいに関するアンケート調査項目

平成 年 月 日

以下の質問について、一番当てはまる番号に○をつけてください。
 なお、記入する箇所に関しては、必ず枠内に収まるように記入してください。

問1. あなたの「年齢」、「学年」、「名前」を教えてください。

年齢（ 歳） 学年（ 年生） 名前（ ）

問2. あなたはよさこいを始めてどれくらい経ちますか？また、他に習い事やダンスはしていますか？
 ダンスをしていれば、そのジャンルと歴を教えてください。

よさこい歴（ 年・ ヶ月）

その他の習い事（ ）

その他のダンスのジャンル（ ） 歴（ 年・ ヶ月）

問3. 今から行う質問に関して、「1. そう思う、2. 少しそう思う、3. どちらともいえない、4. あまり思わない、5. 思わない」の当てはまる番号に○をつけてください。

a	あなたは自分が積極的だと感じていますか。	1	2	3	4	5
b	あなたは周囲の友達と協力することが得意ですか。	1	2	3	4	5
c	あなたは自分のことは自分で取り組もうと思えますか。	1	2	3	4	5
d	あなたは自分で自分が上手に踊れていると思えますか。	1	2	3	4	5
e	あなたはよさこいが好きですか。	1	2	3	4	5

問4. あなたはよさこいを普及させたいと思いますか？

はい ・ いいえ

問5. 問4で「はい」と答えた方のみお答えください。

あなたはなぜよさこいを普及させたいと考えましたか？

例) みんなで踊ることが楽しいから など

ご協力ありがとうございました。

2016年度（アンケート調査・〇〇〇〇）

5. スキル調査

スキル調査に関しては、本研究の対象となる女子生徒のよさこい動作の技術を比較するため、実験調査前の平成28（2016）年7月と実験調査後の11月における2度にわたって調査を行った。

スキル調査の項目としては、本研究の指導者が独自（オリジナル）に作成した「鳴子」、「リズム感」、「腕の伸び」、「ステップ」、「表情」の5項目である。これらの評価は、「1. 常時できていない、2. できていない時が多い、3. どちらともいえない、4. できている時が多い、5. 常時できている」の5段階評価により分類した（表2）。

6. インタビュー調査

インタビュー調査については、実験調査後の平

成28（2016）年11月に行うアンケート調査の対象となる女子生徒と保護者に実施した。

なお、質問内容はアンケート調査において変化の見られた項目に関して、「なぜ、その番号にしたのか」、「調査期間中に変化が起きたのは、なぜか」、「よさこいを取り組み始めてから自分自身が変化したこと」など、特に「家庭内での行動や発言」、「学校での行動や発言」に対する変化を中心にインタビュー調査を行った。

7. 分析方法

アンケート調査およびスキル調査で得られた回答は、パーセント表記および点数表記で示した上で前後比較を実施した。

表2. よさこいに関するスキル調査項目

〈指導者用スキルチェックシート〉

平成 年 月 日

「鳴子」

- | | | |
|--------------|---------------|--------------|
| 1. 常時できていない | 2. できていない時が多い | 3. どちらともいえない |
| 4. できている時が多い | 5. 常時できている | |

「リズム感」

- | | | |
|--------------|---------------|--------------|
| 1. 常時できていない | 2. できていない時が多い | 3. どちらともいえない |
| 4. できている時が多い | 5. 常時できている | |

「腕の伸び」

- | | | |
|--------------|---------------|--------------|
| 1. 常時できていない | 2. できていない時が多い | 3. どちらともいえない |
| 4. できている時が多い | 5. 常時できている | |

「ステップ」

- | | | |
|--------------|---------------|--------------|
| 1. 常時できていない | 2. できていない時が多い | 3. どちらともいえない |
| 4. できている時が多い | 5. 常時できている | |

「表情」

- | | | |
|--------------|---------------|--------------|
| 1. 常時できていない | 2. できていない時が多い | 3. どちらともいえない |
| 4. できている時が多い | 5. 常時できている | |

【指導者サイン】

2016年度（スキル調査・〇〇〇〇）

Ⅲ. 結果と考察

本研究では、「よさこい指導に関する取り組みについて」のテーマを元にU小学校の解放団体であるよさこいチームに所属する小学校高学年11名(11.1±0.8歳)の女子生徒を対象に、よさこいに関するアンケート調査、スキル調査およびインタビュー調査を実施した。そして、よさこいが子どもの心(協調性や積極性など)とからだ(表情や踊りのスキルなど)に与える効果には、どのような関連性がみられるのかについて明らかにし、本調査を基に今後のよさこい指導に生かすことであった。

1. アンケート調査に関する内容について

問1. あなたの「年齢」、「学年」、「名前」を教えてください。

本調査における対象者は、U小学校解放団体であるよさこいチームに所属している小学校高学年の女子生徒(11.1±0.8歳)であった。図1に示したアンケート対象者の内訳を確認したところ、おおよそ幅広い年代(9歳から12歳まで)に分散していることが明らかとなった。

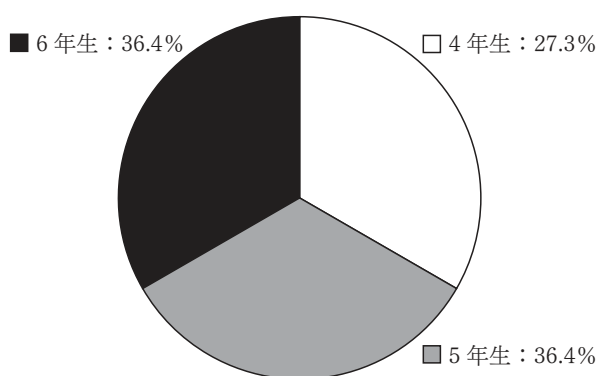


図1. 対象学年について

問2. あなたはよさこいを始めてどれくらい経ちますか? また、他に習い事やダンスはしていますか? ダンスをしていれば、そのジャンルと歴を教えてください。

あなたはよさこいを始めてどれくらい経ちますかの問いについて、学年別に分類することにより

「よさこい歴」の平均値を算出したところ、小学4年生は2.1±3.4年、小学5年生が2.0±1.8年、6年生は2.4±0.8年を示した。その結果、個人差はあるものの、各学年の平均値にさほど特徴となる差がない傾向を示していることが明らかとなった。

また、その他の習い事に関しては、習い事をしていると回答した3名(約27.3%)が競技スポーツであるバドミントンを行っていた反面、残りの8名(約72.7%)はダンス以外の習い事は実施していないことが示された。その要因として考えられることは、夏から秋のシーズンである8月から10月になると、毎週のように「地域のお祭り」や「よさこいに関するイベント、ボランティアによる演舞」があることから、それらの出演が疎かになる可能性を考慮していることが推察される。そのため、長期にわたって他の習い事を始めることが難しい状況が起こりうるのではないかといえる。それほど「よさこいの動き」は、ある一定の段階までの技術を習得するために時間が必要となることが理解できる。

さらに、その他のダンスのジャンルを習っている女子生徒の割合としては、約54.4%(6名の生徒が回答)を示しており、ジャズダンスおよびヒップホップダンスそれぞれが約50%(5割:各3名)を示す回答となった。いわゆる約半数の女子生徒が他のジャンル(ジャズダンス・ヒップホップダンス)のダンスを習っていることが明らかとなった。事実、よさこい歴は2.4±2.4年であるのに対し、他のジャンルのダンス歴が4.8±1.9年と示されているように、おおよそ約2倍程度の差があることから判断できる。つまり、この結果より推察されることは、よさこいを始める前の取り組みに「ダンス」というスポーツが存在しており、このダンスの良さを活かしつつ学ぶことができる仕組みになっていると考えられる。

問3. 今から行う質問に関して、「1. そう思う、2. 少しそう思う、3. どちらともいえない、4. あまり思わない、5. 思わない」の当てはまる番号に○をつけてください。

今から行う質問に関して、「1. そう思う、2. 少しそう思う、3. どちらともいえない、4. あまり思わない、5. 思わない」の当てはまる番号に○をつけてくださいの問いにおいては、5つの質問項目を設定(a～e)することにより個人の特徴を見出そうとした。

表1に示されているように「a. あなたは自分が積極的だと感じていますか(積極性)」、「b. あなたは周囲の友達と協力することが得意ですか(協調性)」、「c. あなたは自分のことは自分で取り組もうと思えますか(自主性)」、「d. あなたは自分で自分が上手に踊れていると思えますか(自己評価)」、「あなたはよさこいが好きですか(愛着)」について、それぞれ積極性、協調性、自主性、自己評価、愛着にまとめた上で点数化を実施した(表3)。なお、点数が低いほど良い結果を示す評価として定義した。

その結果、「積極性」に関する調査前(7月)と調査後(11月)を比較したところ、調査前は25点であったが調査後は27点を示し、若干ではあるが点数が高い傾向であることが明らかになった(表3)。このように「積極性」の項目においては、ほとんどの女子生徒の調査前後に対する評価は一定であったが、その中でも評価が上がったのは1名、逆に評価が下がったのは3名であった。それは本調査期間中において最高学年であった中学生が受験のため長期で休んでいたため、中学生が担当していた花形パートやウォーミングアップのリーダー等の役割を担うようになったことが、1名の評価が向上した要因ではないかと考えられる。逆に評価の下がった3名は、事実インタビュー調査に関しては積極的な行動が増えたと発言していることから、自分以外の女子生徒の積極性が向上されているのを目の当たりにし、自身の積極性を数値として強く示すことができなかつたのではないかと考えられる。

次に、「協調性」における項目の前後比較を実施したところ、調査前よりも調査後の点数(24点から21点へ変化)が低値を示したため、女子生徒の協調性に関する内容は少数であるが良い傾

向を示した(表3)。これら「協調性」の評価が向上した要因は、新規に「よさこいチーム」へ入団した女子生徒への教え合い活動によって、今まで以上に自主的な取り組みが頻繁に行われるようになったことが影響しているといえる。金田(2012)は、よさこい活動は「教えあい」が成立しやすい面があり、相互作用が生まれやすいと述べている。本番に成功したとき等「みんなで」というつながりを感じた時に「楽しい」「嬉しい」と感じ、踊り切った達成感との相乗効果で「自分たちのよさこい」となり、よさこいを通してメンバーへの愛着が深まり、人間関係が深まると報告している(金田, 2012)。本研究においても、協調性の評価が向上していることから、同様の結果を示した。このように本研究の調査対象である「よさこいチーム」は、日々の練習後や大会などの本番後に当日一番輝いていた女子生徒(基本的に1名のみではあるが、大会によって複数名に授与)に「スマイル賞」を授与することになっている。この賞は練習を含めた本番までの取り組みも評価に反映するため、自主的な活動(ダンスの振りが中心)が増えたことなどの要因が、「協調性」の項目に対する変化につながったことが考えられる。

また、「自主性」に係る点数の変化を調べた結果、調査前に比べて調査後において大幅な点数の増加(調査前18点・調査後23点)が見られた(表3)。この「自主性」に関する評価が低値を示した要因については、協調性の部分で示した新規に入団した女子生徒の自主的な活動が関連しているのではないかと推察される。それは、いわゆる「自分のことは自分です」という姿勢も含みつつ、これらの要因よりも「周りの友達と協力する」という姿勢に重要性を感じていることが窺える。白井(2012)は、大学生を対象に行われたコミュニティダンスワークショップの参加体験とイメージに関する研究を行い、参加体験により心理状態がポジティブな傾向へ変化する可能性が大きいことや、主体的に取り組むことによる心身の変化や感情がより良い刺激を与えることにつな

がると報告している。実際に、地域のイベントや施設でのボランティア活動における演舞等により、地域貢献としての活動を表彰されている本調査のチームは、よさこいというジャンルでコミュニティダンスに取り組んでいるといえる。本研究でも評価が低下していることから、通常であれば少しネガティブな意見として捉えられがちであるが、裏を返すとポジティブな意見として捉えることが可能である。つまり、「よさこいチーム」のチームワークが向上していることが明白になったと解釈できる。

そして、「自己評価」に対する調査前後の項目に注目すると、結果的には点数が調査後は低値(29点から28点へ)を示していたが、全体としては大幅な変動が見られなかった(表3)。自己評価の結果を詳細に分類すると、3名の女子生徒が一定の値を示し、さらに4名の評価が上がり、残り4名の評価が下がる結果となった。特に評価が下がった4名に焦点を絞ってみると、4名ともスキル調査の評価は上がっていることから、調査期間中における様々なイベント(お祭り等)によって他チームに興味・関心を抱いたため、これらの演舞を観察することにより自分自身の技術レベルの基準が上がったのではないかと考えられる。

最後に、愛着(よさこいが好きか)への調査結果(調査前後)を比較したところ、自己評価と同様の結果(12点から11点へ)を示した(表3)。この愛着(よさこいが好きか)の変化はごく少数を示していたが、調査後の点数に向上が見られたことから、本調査の「よさこいチーム」のよさこいに対する愛着は良好な関係を深く構築していることが明らかとなった。なお、協調性の調査結果でも記したが金田(2012)は、本番に成功したとき等「みんなで」というつながりを感じた時に

「楽しい」「嬉しい」と感じ、踊り切った達成感との相乗効果で「自分たちのよさこい」となり、よさこいを通してメンバーへの愛着が深まり、人間関係が深まると述べている。このことから、本研究でも女子生徒達がお互いの愛着を分かち合った結果、よさこいチームやよさこいそのものへの愛着が深まったと考えられる。

問4. あなたはよさこいを普及させたいと思いますか？

あなたはよさこいを普及させたいと思いますかとの問いに対して、平成28(2016)年7月の調査では「はい」と答えた女子生徒は90.9%(約9割、10名)、「いいえ」と回答した女子生徒は9.1%(約1割弱、1名)であった(図2)。このように「はい」と答えた女子生徒は、約9割程度を示していることが明らかとなった。この結果から推察されることは、大部分の女子生徒がよさこいを「普及させたい」という積極的な強い気持ちの表れがある反面、若干ではあるがよさこいを「普及させたくない」との消極的な回答に対しては真摯に受け止めなければいけない。このよさこいを「普及させたくない」と答えた女子生徒は、日頃から人前に立つ恥ずかしさを感じていることから、自分がよさこいを踊っている姿を他人に見られたくないという要因が含まれていると考えられる。

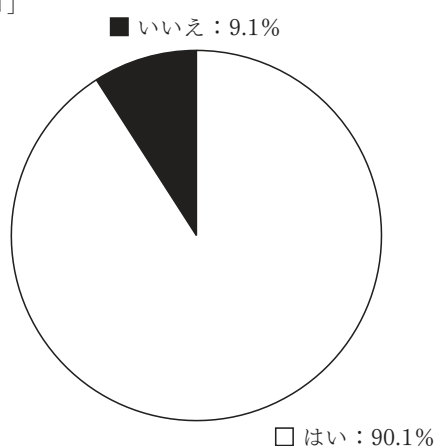
しかしながら、3か月半経過後の11月における調査では、「はい」と答えた女子生徒は100.0%(10割、11名)を示しており、この結果は「よさこいチーム」の全員が「普及させたい」という意識に変化が生じているといえる(図2)。それは調査実施期間中に自己肯定感が高まるような自信がついたため、多くの見物客に自分の踊りを見てもらいたいという願望(意識)が芽生えたことが「普及したい」という強い気持ちにつながったの

表3. アンケート調査結果について

項目	積極性		協調性		自主性		自己評価		愛着	
	7月	11月	7月	11月	7月	11月	7月	11月	7月	11月
合計(点)	25	27	24	21	18	23	29	28	12	11

※「点数が低いほど良い結果を示す評価」として定義。

「7月」



「11月」

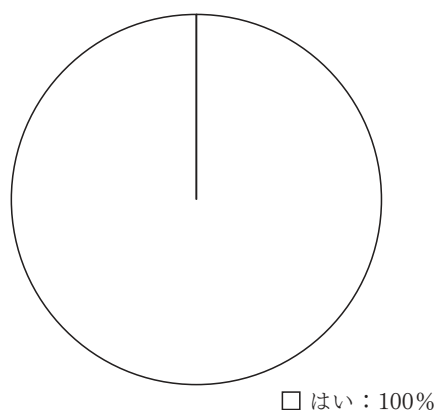


図2. よさこいの普及について

ではないかと推察される。つまり、本研究におけるよさこい指導に一定の成果が得られたと考えられる。

問5. 問4で「はい」と答えた方のみお答えください。あなたはなぜよさこいを普及させたいと考えましたか？

問4で「はい」と答えた方のみお答えください。あなたはなぜよさこいを普及させたいと考えましたかの問いに関しては、「問1～問4」を回答した上での意見が以下のように記されていた（順不同、回答者記載のまま明記）。

A. 平成28（2016）年7月のアンケート調査について

- ① 総踊りなど、みんなで踊ると楽しいので、それがきっかけでよさこいが好きになると思うから、よさこいを広めたいと思います。
- ② みんなで踊るとすごく楽しいし、上手く踊れたらとてもうれしいから。
- ③ 楽しいからみんなで踊ったらもっと楽しくなりそうだから。
- ④ 大勢で楽しく踊ってみたいから。
- ⑤ もっといろんな人と大ぜいで踊るといまよりもっともっと楽しくなるとうれしいから。
- ⑥ みんなで楽しく、えがおでおどって仲良くしたいから。みんなにどんどんみてもらって、入ってきてほしいから。
- ⑦ みんなで踊ると、他の人たちにも知ってもら

えるから。「こんなに楽しいよ～」とって、他の人について、知ってもらえるから。

- ⑧ みんなが踊ることを楽しいと思ってほしいから。
- ⑨ みんなで踊ることが楽しいから。
- ⑩ おどるのは楽しいから。

B. 平成28（2016）年11月のアンケート調査について

- ① みんなで踊ると楽しいし、盛り上がるから。
- ② たくさんの人に知ってもらうともっと踊れることが多くなると思うから。
- ③ いっぱい人で楽しく踊れば笑顔があふれてもっと楽しくなると思うから。
- ④ 大人数で、もっと楽しくみんなで踊りたいから
- ⑤ おきゃくさんを笑顔にしたいから。
- ⑥ 楽しいし、広まっていくと、みんなに「楽しい」と思ってほしいから。
- ⑦ みんなで踊ると笑顔になって、世界中のみんなが笑顔になると楽しいから。
- ⑧ 1人に広まると、「このよさこいたのしいよ」と広まっていくし、みんなで踊ると楽しいし、面白いから。
- ⑨ えがおがひろまるから。
- ⑩ みんなで踊ることが楽しいから。
- ⑪ よさこいをしていない人もいっしょにおどれるから。

これらのアンケートの回答から得られた「よさ

こい指導に関する取り組みについて」に対する意見として多く挙がっていた項目は、「みんなで踊りたい」、「大勢で踊りたい」等、よさこいを認知してもらうことだけではなく、一緒に共に踊ることを視野に入れた意見が多く見られた。事実、よさこいには総踊り（お祭り毎にオリジナル楽曲による全員参加による踊り）と呼ばれるものがあり、その経験から「みんなで踊りたい」という意見が増えていることが考えられる。これは全国各地のさまざまな場所で実施されている「よさこい祭り」のことを指している。実際のところ、いわゆるよさこい祭りの大小に関わらず、祭りの最後に出演者だけではなく、観客やスタッフも全員自由参加によりステージ場へ上がって踊る時間があることから、その状態を「総踊り」と呼んでいる。この総踊りの特徴として、全国各地の地方有数の民謡を基調とした楽曲や、それぞれの祭りオリジナルのもの、全国的に広く認知されているよさこい踊りなど、総踊りに使用する曲はさまざまとなっている。本研究の対象である女子生徒は全員この総踊りへの参加経験があり、大勢で踊ることの楽しさを理解していることは明らかである。また、少数の意見であったが「お客さんを笑顔にしたい」という積極性や協調性の意味合いが含まれている内容も挙げられていた。そのため、よさこいが普及することにより観客に見てもらえる機会が増えると、踊っている出演者だけが楽しむのではなく、出演者の演舞を閲覧している観客にも楽しさを伝えたいという気持ちが、率直な意見として回答したのではないかと考えられる。

2. スキル調査に関する内容について

本研究のスキル調査に関する内容については、本調査を実施した指導者のオリジナルで作成した「鳴子」、「リズム感」、「腕の伸び」、「ステップ」、「表情」の5項目の設定により成り立っている（表2）。これら5項目の評価をそれぞれ分類して考察することにより、アンケート調査と同様に個人の特徴を把握することにした。なお、点数が高いほど良い結果を示す評価として定義した。

これらの結果を各項目について比較したところ、まず「鳴子」のスキルは調査前（7月）と調査後（11月）の点数がそれぞれ21点および35点を示していたことから、大幅な点数の向上が見られたことを意味している（表4）。この「鳴子」のスキルが上達した背景には、今年度（2016年度）7月より開始した「鳴子」を重点とした基礎練習の成果が大幅な点数の向上につながったと考えられる。

次に、「リズム感」に関するスキルの調査前後を比べると、調査前が25点、調査後が34点であったため、調査後の点数が大幅に上がったことが明らかとなった（表4）。このように「リズム感」のスキル上達に影響を与えた内容としては、「鳴子」の練習中に楽曲をしっかりと聞く姿勢を保っていたことにより、その中でリズム感を意識させる指導を継続して実施したことが最終的な成果につながったといえる。

また、「腕の伸び」に関するスキル調査前と調査後を比較した結果、それぞれ25点から36点へと点数が移行していたため、この項目も大幅な点数（11点向上）の変化が見られた（表4）。「腕の伸び」のスキルが上達した内容は、主運動である踊りを一連の流れとして「ウォーミングアップ」、「鳴子練習」、「メイン演舞曲練習」の順番において実施し、特に指導する中で重点的に意識するような指示を出したことが要因として挙げられる。

しかしながら、表4に示した「ステップ」のスキルにおける調査前と調査後を比べたところ、調査後（34点）は調査前（28点）よりも6点の点数の伸びであったことが明らかになっている。このスキル上達度合いの指標である点数の伸びが少しであったことから、ステップへの上達は見られたものの特徴となり得る差ではないことが推察される。そこで実際のステップの動きをまとめてみると、メイン演舞曲の練習段階において意識できるよう指導を実施しているが、その他の練習中にはあまり強く意識していないことが原因として考えられる。

表4. スキル調査結果について

項目	鳴子		リズム感		腕の伸び		ステップ		表情	
	7月	11月	7月	11月	7月	11月	7月	11月	7月	11月
合計(点)	21	35	25	34	25	36	28	34	26	37

※「点数が高いほど良い結果を示す評価」として定義。

さらに、「表情」に関する調査前後の結果に注目すると、調査前が26点、調査後が37点という値であったため、点数の増減については11点の大幅な変化が示されていた(表4)。これらの「表情」のスキル上達に関しては、本調査の「よさこいチーム」が独自に提供している「スマイル賞」が大きく関連しているといえる。この取り組みは、本調査の前年度である平成27(2015)年度より実施し始めた「その日に一番輝いていた踊りに与えられる賞」であり、毎週の練習と試合での本番にて1名が選出されるが、選考基準として「表情の良さ」が第一に重要視されている。つまり、「表情」におけるスキル向上の要因として、小学校高学年である女子生徒は「スマイル賞」を受賞することを最終的な目標としていることが心理的な側面から読み取れる。

最後にスキル調査に関してまとめると、全体的に各項目を見渡してみても「よさこい動作」の技術の向上が明らかとなった。それは他の運動・スポーツ種目に比べると、特異的な動きを構成する場面が多くみられるため、本調査のようにスキルの上達が観察されているということは根気よく指導することの重要性を示唆するものである。

3. インタビュー調査に関する内容について

インタビュー調査においては、実験調査終了後における11月に行うアンケート調査の対象となった女子生徒と保護者に聞き取りを実施することとした。実際に、アンケート調査において変化の見られた項目から、特に「家庭内での行動や発言」、「学校での行動や発言」に対する変化を中心にインタビュー調査から結果を示した(順不同、回答者記載のまま明記)。

A. 平成28(2016)年11月のインタビュー調査について

「A.S.女子生徒」

よさこいを始めてから、明るくなった。友達も増えたし、自分から話しかけることが多くなった。妹と家でよさこいの話をしたり練習したりするようになった。運動会ではダンスのリーダーをやった。

「A.M.女子生徒」

今でもあんまり目立つことも、自分の意見を言うことも得意ではないけど、出来るようになった。家で姉とケンカできるようになったし、嫌な時は「嫌だ」と口にできるようになった。

「A.S.・A.M.保護者(双子)」

引っ込み思案で、人前に出ると泣いていたが、よさこいを始めてからは人の前や舞台上に立てるようになった。引っ込み思案と人見知りを治そうと、何かを習わせようとしても「恥ずかしい」「やりたくない」と泣いていたが、地元の公園でよさこいの演舞を見て、初めてやってみたいと言出し、よさこいを始めた。「人に見てもらいたい」という思いを口に出すようになった。

「T.N.女子生徒」

大きなお祭りでたくさんの人の前で踊る経験から、学校でもいろいろなことに自信が持てるようになった。自信がついてきたから、前よりももっと笑顔で踊れるようになって、踊ることがさらに楽しくなってきた。

「T.N.保護者」

元は消極的な性格で、ステージに立って人前に出るなんて考えられなかった。よさこいを始めてからはどんどん積極的になってきたし、笑顔が増えた。先日ルミナリエに行った際「これだけたくさんの人に見てもらえたら、すごい拍手がもらえるやろなあ、ここで踊りたいなあ」と発言してい

た。今までならありえない。

「H.A.女子生徒①」

友達も増えたし、自分から話しかけるようになった。学校でも、人目のある所でも踊れるぐらい度胸がついた。よさこいを始める前より、明るくなったこともあり、毎日が楽しいと思う。

「H.A.保護者①」

授業ではなかなか手を挙げられないようだが、体育や運動となると、リーダーシップを発揮できるようになってきた様子。周囲の意見をよく聞くようになった。よさこいだけでなく、そう言った人間関係からも刺激を受けて、上を目指すようになった。

「I.R.女子生徒」

ずっと、踊ることに興味があったけど、自分はそんなキャラではないし、人に見られるのも恥ずかしいと思っていた。毎年音楽会もすごく緊張していたが、あまり緊張しなくなった。学校でもよく発表するようになってきた。よさこいを始めてから、踊れるようになったし、お客さんに見てもらいたいと思うようになった。やりたいこととか、気持ちを伝えられるようになった。始めたときは、本番にて人前で踊ることが恥ずかしく感じてしまい、「普及させたくない」と思っていた。しかし、何度も何度も踊って、大きなお祭りにも出演して、お客さんに見てもらうことが嬉しくなってきた。お客さんに楽しんでもらいたいし、もっとたくさんの人によさこいを知ってもらいたいと思うようになった。

「I.R.保護者」

大人しく、控えめな性格で、舞台上上がるなんて考えられない子だった。自分の感情を人前にあまり出さない子だったが、出せるようになってきている。異年齢の子と関わりを持つようになった。家でテレビを見ている時や朝ご飯中、歯磨きをする前等ふとした時に踊りだすようになった。妹が先にやりたいと言いつつ出したが、見学に行くことを頑なに拒んでいた。理由は、見てしまったら絶対「やりたい」と思ってしまうから。踊っている自分が好きで、楽しいと思っている。

「K.S.女子生徒」

違う学年だけでなく、違う小学校の友達もできた。よさこいを通して友達ができることが嬉しい。

「K.S.保護者」

新しく入ってきた子達に負けたくないからと、家で練習を始めるようになった。よさこいの準備は自分自身でやるようになった。スマイル賞が欲しいから、目標を持って踊るようになった。

「N.N.女子生徒」

前は人前に立つと緊張していた。自分から進んで何かをやるのが出来ないことのほうが多かった。今は目立つパートもやりたいって思えるし、手を挙げられるようになった。総踊りも、以前は後ろの目立たないところで踊っていたが、今は前の方に行きたいと思える。また、体が柔らかくなり、体育の授業で足を上げるなど等の動きの時に活躍できるようになった。学校ではよさこいクラブに所属し、率先して振りをメンバーに教えている。

「N.N.保護者」

自分のことだけでなく、妹を含む周りの年下の子どもたちのお世話ができるようになった。人見知りの強い子だが、慣れるのが早くなった。参加型イベントにて「いっておいでよ」と声をかけても以前は絶対に行かなかったが、今は自主的に参加することも増えた。

「H.A.女子生徒②」

楽しいことも嬉しいこともいっぱいあるけど、地元で踊ると学校の子達が見に来て、からかわれるのが嫌だ。でもそれで会話につながることもある。「見たで」「いつ練習してるん？」など。

「H.A.保護者②」

よさこいのある日は遊びに出ているけど早く帰ってくるし、準備が早い。今まで時間に対してルーズな面があったが、時間を守れるようになった。自分より小さな子が周りにいることが増えたから、面倒見がよくなった。ダンスをずっと習っているが、よさこいを始めてからダンスでも褒められることが増えた（大きく踊れるようになった・笑顔が自然に出せるようになった等）。

「K.H.女子生徒」

始めたばかりで全然分からないけど一つだけ変わったことがある。それは、チームで活動する時はみんなと合わせないといけないと分かったこと。好きな時に休憩したり遊んだり、お腹がすいたらご飯を食べたりするのではなくて、チームのみんなのことを考えて動かないといけないことが分かった。

「K.H.保護者」

自分のことばかりを話す子だったが、チームに入ってからは周りの子を気に掛けるようになり、周りの子の話題を出すことも増えた。

「S.S.女子生徒」

ダンスでも笑顔で踊れるようになった。スマイル賞があったから笑うようにしようと思えた。笑顔で踊るだけで、同じ踊りでも光って見えるようになることが分かった。

「S.S.保護者」

舞台上で笑顔を作ることが上手になった。口にはまだ出せないが、「センターで踊りたい」という自己表現ができるようになった。

「M.Y.女子生徒」

友達ができた。みんな上手で、自分も頑張ろうと思えるようになった。

「M.Y.保護者」

もともと負けず嫌いな性格ではあったが、積極的ではないため、その感情を口に出すことがなかった。周りの子達が踊れているのを見て、悔しさから号泣し、家で自ら教本DVDを流し、猛特訓をしていた。まだまだ積極的ではないが、積極性は出てきたと感じた。

その中でも、よさこいに取り組む以前と取り組んで以後の動きの違いについて興味深かった3名の女子生徒におけるインタビュー内容を抽出し、女子生徒の保護者へのインタビュー、担当指導者のよさこいの動きへの講評などを示した。

B. T.N.女子生徒および保護者に対する担当指導者のよさこいの動きへの講評について

T.N.女子生徒（以下：T.N.）のインタビュー調査より、全体的にT.N.はよさこいを通して積極

性が増していることが窺え、さまざまな取り組みに対する自信が持てるようになったことは明らかである。やはり、よさこいの動きが持っている独特な感性が、大勢の観客の前で踊るという体験が積み重なることにより、舞台上での経験値に大きく影響を与えているはずであると考えられる。実際のところ、最高学年であったためソロパートを任されていたり、普段の練習においてもリーダー的な役割を担ったりしていることが自信につながっている。最終的な結果として、積極的な行動や活発な発言が垣間見られるようになったのではないかといえる。

C. I.R.女子生徒および保護者に対する担当指導者のよさこいの動きへの講評について

I.R.女子生徒（以下：I.R.）のインタビュー結果から、よさこいを通してI.R.においても積極性が向上していることは調査より読み取れる。これまでI.R.は元々自分を表現したい気持ちはあるが、どうしても恥ずかしさが勝っているため表現することが億劫になっていた。しかしながら、よさこいを始めたことをきっかけに少しずつではあるが、指導者も驚くような発言や行動が表現できるようになってきた。特に、I.R.に関しては人前に入る経験がほとんどなかったため、本研究の調査を実施した7月の時点では「普及させたくない」という意見を述べていたが、11月には「普及させたい」に心境の変化が見られていたことから、よさこいの踊りを通して精神面での取り組みに大きな影響を与えたことが明らかとなった。

D. N.N.女子生徒および保護者に対する担当指導者のよさこいの動きへの講評について

N.N.女子生徒（以下：N.N.）におけるインタビュー内容として、N.N.はよさこいを通して日常生活（学校生活を含む）での行動など、積極性・協調性・自主性の面で大幅な変化を示していることが明白である。事実、以前はフォーメーション決定時、最前列で踊ることを嫌がり、必ず2列目以降に並んでいたが、現在は自分から最前列に出てくるほど積極的な行動を取れるようになったことから窺える。

E. インタビュー調査（まとめ）

最後にインタビュー調査についてまとめると、全体的に積極性の向上が強く窺える結果であったが、その他にも自主性や協調性の変化も話の中で垣間見ることができた。それは主に大勢の観客の前で踊るという体験が積み重なる舞台上での経験が関連しているといえる。また、自身のスキルが向上したことからも自信が付き積極性が増したものと考えられる。さらに、インタビュー調査にて心身の上達を観察することができた。

よって、本研究で取り上げたよさこい指導に関する取り組みの特徴については、全体的に女子生徒の積極性や協調性に対して一定の成果が得られたことから、少なからず身体面（スキル向上など）および精神面（表情や踊りなど）に良い影響を与えている活動であることが明らかとなった。これは、いわゆるよさこい動作におけるスキルアップにより自信がついたことや、個人よりもチームであることの意識が高まった教え合い活動が、それぞれの積極性や協調性につながる取り組みに影響を与えたことは間違いない。

今後の課題として、よさこいの動きに関連がある「からだ」の面については一定の傾向を把握することができたため、アンケート調査、スキル調査、インタビュー調査からでは読み取ることが難しかった「心」の面の変化に対する調査（数値化など）を実施する必要があると考えられる。

IV. まとめ

本研究ではU小学校の解放団体であるよさこいチームに所属する小学校高学年の女子生徒を対象に「よさこい指導」を実施し、よさこいに関するアンケート調査、スキル調査およびインタビュー調査を行い、よさこいが子どもの心（協調性や積極性など）とからだ（表情や踊りのスキルなど）に与える効果には、どのような関連性がみられるのかについて明らかにすることを目的とし、概ね以下の結果が得られた。

1) よさこい歴を学年別に分類すると、小学4年生は 2.1 ± 3.4 年、小学5年生が 2.0 ± 1.8 年、

6年生は 2.4 ± 0.8 年を示した。

- 2) よさこい以外の習い事について、習い事をしていると回答した3名（約27.3%）が競技スポーツであるバドミントンを行っていた反面、残りの8名（約72.7%）はダンス以外の習い事は実施していないことが示された。また、その他のダンスのジャンルを習っている女子生徒の割合としては、約54.4%（6名の生徒が回答）を示しており、ジャズダンスおよびヒップホップダンスそれぞれが約50%（5割）を示す回答となった。
- 3) よさこい全般に関する質問を「積極性」、「協調性」、「自主性」、「自己評価」、「愛着」の5項目に設定した上で、その結果を示した。ここでは低値が高評価であるため、協調性（24点から21点）、自己評価（29点から28点）、愛着（12点から11点）に高評価が得られた。同様に、積極性（25点から27点）および自主性（18点から23点）は低評価であった。
- 4) よさこいの普及に関して、7月に実施した調査では「はい」と答えた女子生徒は90.9%（約9割、10名）、「いいえ」と回答した女子生徒は9.1%（約1割弱、1名）であった。また、3か月半経過後の11月における調査において、「はい」と答えた女子生徒は100.0%（10割、11名）を示した。
- 5) よさこいの普及に対する意見として多く挙がっていた項目は、「大勢で踊ると楽しいから」を筆頭に、「踊る楽しさを知ってほしい」、「観客に楽しんでもらいたい」などの意見を含む内容が示された。なお、調査前は「大勢で踊ると楽しいから」という自分に焦点をあてた意見が主であったが、調査後は「観客に楽しんでもらいたい」とした観客に焦点をあてた意見が述べられた。
- 6) スキル調査においては、指導者が独自に設定した項目を用いて評価（点数が高い方が高評価）を示した。それぞれ「鳴子」は21点から35点、「リズム感」は25点から34点、「腕の伸び」は25点から36点、「ステップ」は28

点から34点、「表情」は26点から37点という結果であったことから、全項目の値が向上した。

- 7) インタビュー調査では、全体的に積極性の向上が強く窺え、次いで自主性や協調性の変化も話の中で垣間見ることができた。それは主に大勢の観客の前で踊るという体験が積み重なる舞台上での経験が関連しているため、自身のスキルが向上したことから自信が付き積極性が増した結果となった。そして、インタビュー調査にて心身の上達を観察することができた。

以上の結果より、よさこい指導は全体的に女子生徒の積極性や協調性に対して一定の成果が得られたことから、少なからず身体面（スキル向上など）および精神面（表情や踊りなど）に良い影響を与えている活動であることが明らかとなった。

V. 参考文献

原田純子 (2012) ダンス・ワークショップにおける学びについての一考察—創造体験とグループ活動の意味—日本女子体育連盟学術研究, 28 : 17-29.

秦恵美子 (1999) 選択ダンス授業—2年次段階の学習内容—。高校教育研究, 51 : 41-55.

金田美恵 (2012) 中学校における集団生活の役割と意義に関する一考察—「よさこい踊り」の心理的・社会的特性に注目して—。滋賀大学大学院教育学研究科論文集, 第15号 : 1-10.

河合史菜 (2015) 小学生を対象としたダンス・ワークショップに関する一考察—進行者に着目して—。長崎大学教育学部紀要, 1 : 111-124.

公益財団法人 高知市観光協会 (2016) よさこい祭り.

<http://www.welcome-kochi.jp/yosakoi/zenkoku.html>, (参照日：平成28年10月26日).

増山尚美 (2003) コミュニティ・DWS にみる生涯学習社会における学習形態について北海道浅井学園大学生涯学習研究所紀要「生涯学習研究と実践」, 第4号 : 123-133.

宮川萬寿美・宇佐美かおる・東元りか (2015) 子どもの発達を総合的に促す保育活動の研究 (1)～箱根町よさこいソーラン踊りを通して～. 小田原短期大学研究紀要, 第45号 : 78-80.

文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説. 体育編 : 1-125.

NPO 法人 ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク (2010) コミュニティダンスとは. <http://www.jcdn.org/site0000/about/activity.html>, (参照日：平成28年10月26日).

白井麻子 (2012) コミュニティ DWS の参加体験とイメージに関する研究—大学生を対象として—。大阪体育大学紀要, 43 : 53-65.

和田春恵 (2010) 幼児期の親子ダンス教室における子どもの成長に対する母親の意識調査. 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 第45号 : 73-78.

YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会・体育 YOSAKOI ソーラン研究会 (2006) YOSAKOI ソーランの教え方・指導者用テキスト. 明治図書 : 東京, 1-131.

湯浅理枝 (2016) 系統的な学習を意識した表現リズム遊びの指導. —踊ることへの抵抗感に着目した『ダンス♪ダンス☆ダンス!』の実践を通して—. 広島大学附属三原学校園研究紀要, 6 : 136-146.